

〔日本書紀垂仁〕二十三年十一月乙未湯河板舉獻鵠也譽津別命弄是鵠遂得言語、

〔日本書紀景行〕二十七年十二月川上梶帥叩頭曰且待之吾有所言、

〔日本書紀十仁德〕三十年十月口持臣之妹國依媛仕于皇后適是時侍皇后之側見其兄沾雨而流涕之歌曰挪莘辭呂能菟菟紀能瀨挪珥茂能莽鳥輸和餓齊鳥瀨例麼那瀨多愚摩辭茂、

〔古今和歌集十四〕おやのまもりける人のすむめにいとしのびあひてものらいひけるあひだに、おやのよぶといひければ略○中

〔日本書紀神代〕一書曰○中月夜見尊○中然後復命具言其事、

〔日本書紀神代〕一書曰○中伊弉册尊○中謂伊弉諾尊曰吾夫君尊請勿視吾矣言訖忽然不見、

〔萬葉集二十〕陳防人悲別之情歌一首并短歌略○中

知知能未乃知知能美許等波多久頭怒能之良比氣乃宇倍由奈美太利奈氣伎乃多婆久○下

〔東雅總論〕天下の言には古言あり今言あり其古今の間に於て又其方言あり方言の中にも亦各雅言あり俗言あり古言とは太古より近古に至るまで其世々の人の云ひし所の語言なり今言とは近世の人のいふ所の語言なり略○下

〔徒然草上〕何事もふるき世のみぞしたはしき今やうは無下にいやしくこそなりゆくめれ○中たゞいふ言葉もくちおしうこそなりもでゆくなれいにしへは車もたげよ火かげよとこそいひしを今やうの人はもてあげよかきあげよといふ主殿寮人數だてといふべきをたちあかししろくせよといひ最勝講の御聽聞所なるをば御かうのろとこそいふをかうろといふくちおしとぞふるき人は仰られし、

〔物類稱呼一〕物類稱呼諸國方言序○中

そもそもいにしへを去る事遙にしてそのいふ所も彼にうつりこれにかはりて本語を失ひた